

# 童屋一座

わらしやいちぢぎ

## 五月の章

少女の名前は、五月と言った。

少女は海岸の岩場に立って、広い海を見つめていた。夕日の浮かぶ空の下には、丸い水平線に沿って、漁船がちらほらと見える。その漁船と同じ景色の中にあるには不自然な程の、立派な船が航行していた。それはきつと、大勢の大金持ちの貴婦人を運ぶ、大型の外国客船なのだ。その船を食い入るように見つめながら、五月はひとり、思いを巡らせていた。

いいなあ、あの船にはきつとお金持ちの奥様がたくさん乗っているんだ。もしもあたしがあの船のそばで溺れたならば、あの船はあたしを拾ってくれるだろうか。そうすればあたしも、奥様方の目に留まることもあるかも

## 小林史織

しれない……。まあお嬢さん、可愛らしいこと。あたくし、子供がいらないのよ。もし良かったら、あなた、あたくしと一緒に来ませんかしら。ああら、何も心配することないのよ。素敵な先生もつけて差し上げましょう。こんな汚れた着物じゃなくて、もつと素敵なドレスを着せてあげますからね……。

憧れを込めた眼差しで、遠くをゆつたりと進む大きな船を見つめに見つめて、いっその海に今すぐ身を投げてしまいたい、でもあの船に拾ってもらうには、今ここで身を投げても意味はない。焦がれるような乱暴な衝動を、頭の冷静な部分が押し留めていた。

姉ちゃん、姉ちゃん、と後ろから呼ぶ声に振り返れば、そこには、甘い夢のような空想とは程遠い、自分と同じようにぼろを着た弟妹と、漁業で何とか成り立っている、

みすぼらしい村が広がっているばかりであった。



姉ちゃん、姉ちゃん、とあたしの両側にびったりとくっついて、弟と妹が、しつげのなっていない犬みたいにうるさい。家への帰り道、時折止まっては、苔の生えた石だの、棒きれだのを拾っては、楽しげに振り回している。屈みこんで土をいじるせいで、ただでさえ汚れている着物が、ますます汚れた。着物の裾がほつれるのが早いはずだ。「さつさと行くよ」と声をかけて、ようやく歩き出すこともしよつちゆうなのだ。ふと足元に視線を落とすと、妹の下駄の鼻緒が切れかかっているのが見えて、鼻緒をすげ替えなければならぬ、と思ってしまう。自分が嫌だった。何て貧乏臭いのだろう。さつきまで、大きな外国の船を見つめていたのに……。

ため息をつきながら歩いていると、「あら、五月ちゃん」と横から声をかけられた。誰だっけ、と一瞬眉を顰めて、思い出した。ときどきこの村に魚を買いに来る、隣の村のお婆さんだ。「こんばんは、お婆さん」と会釈をすると、お婆さんは、「本当に別嬪さんだねえ、五月ちゃんは」と、あたしを見てしみじみと言った。途端に、気持ちがいやんと立ち直る。胸を張り、背筋を伸ばして、

歩きたくなかった。当然でしょう、と言いたい気持ちをぐっとこらえて、「ありがとうございます」と笑いかけた。あたしは昔から、村一番の器量良しだねえ、とこの村では褒めそやされてきたのだ。そして、どうやらこの辺りでは、あたしが一番の美人らしい。隣の村のお婆さんにまで、こうやって、会う度に言われるのだから。往來を歩くときには、たくさんの視線を集めて、その視線を肌で感じながら、鼻高々に下駄を鳴らすのだ。

お婆さんは、ふと我に返ったような顔をして、「そう言えば五月ちゃん、知っているかい？」と、あたしに尋ねた。「え？」と返すと、お婆さんは、あたしが知らない様子であることに気を良くしたようで、にんまりと笑った。

「もうじきね、この村に良いものが来るらしいんだよ」

「良いもの、ですか？」

「うん。いやね、私が今日ここに来たのも、その噂を聞きつけたからなんだよ。でも、今日はまだ、来てないみたいだねえ……」

内緒話をするようなもったいぶった口調から始めて、最後の方は夢想するような表情になった。あたしは正直に言って、お婆さんの言う良いものとやらが何なのか、あまり興味を持てなかつたので、退屈そうに土をいじっている弟と妹の方を指すようにしながら、「それじ

や、あたしはこれで」と頭を下げた。おばさんははっとしたように、「ああ、そうね。呼び止めちゃって、ごめんねえ。それじゃ、またね」と言った。

あの外国の船以上に、あたしを惹きつける良いものがあるならば、お目にかかりたいものだ。あの外国の船を思い出すと、すぐそこに見えてきた、みすばらしい自分の家が、ますますボロく、小さく、寂れたものに見えた。家に帰れば幼い弟妹たちの世話に追われ、何とも惨めな生活をする毎日だ。戸を開けて、中に入ると、甲高い泣き声が耳に入った。この泣き声は、まだ赤ん坊の、一番下の弟のものだろう。ぎんぎんんと激しく泣き続ける声にうんざりして、下駄を脱ぎながら、「ただいま」と声をかけると、「五月！」と咎めるような声が降ってきた。顔を上げると、母ちゃんが仁王立ちになり、怖い顔をして、あたしを睨んでいた。

「どこへ行っていったんだい。ほら、さっさとおしめを替えておくれ。さっきから泣きっぱなしで、困ってるんだよ」

「……はあ、」

おばさんに褒められて、上向いていた気持ちだが、萎んでいくのを感じた。何であたしが、と、喉まで出かかった言葉を飲み込み、泣き喚く弟の元へと向かう。母ちゃんはぶつぶつと口の中で文句を言いながら、夕食の続き

を作るべく、台所に引き返して行く。替えのおしめを用意して、真つ赤な顔をして泣き喚く弟の元へと向かう。その顔を見ても、湧いてくるのは怒りだけだ。

「泣き止んでよ。あんたが泣くと、あたしが怒られるのよ」

そう呟きながら、弟のおしめを脱がせて、綺麗におしりを拭いてやり、新しいおしめを穿かせる。次第に泣き止み、しゃくりあげるのが止まる。ほっと安心したのも束の間、後ろの方から何か物が落ちる音がして、振り向く。今度は、さっきあたしを岩場まで呼びに来た方の、弟と妹が、お互いの髪を毛をつかみ合って、取っ組み合いの喧嘩になっていた。

「やめなさい、やめなさい！」

そう声をかけながら、二人の間に割って入るものの、やめる気配は無い。あたしは取っ組み合いを引き剥がそうとして、蹴り合っている二人の足にげしげしとやられた。どうやら、妹の大事にしていた、おはじきやらビー玉やらが入った箱を、弟が奪おうとして、叩き落としてしまったらしい。床に落ちた箱と玩具を指差し、「あやまって！」と喚く妹に、「やなこった！」と、舌を出して弟が言う。やつのことで引き剥がし、「喧嘩しないの！」と、二人に一喝すると、二人はしゅんとした顔をして、「ごめんなさい」と、もごもごと謝った。

ため息をついたとき、今度は横の方でどたり、と音がした。見ると、帰ってきたときには昼寝をしていた妹が、床にうつ伏せに張り付くようにして、転がっていた。散らばったおはじきやらビー玉やらに足をとられて、転んだようだ。うわあ、と火がついたように泣き出す妹の元へと、慌てて駆け寄り、抱き起こしてやる。そして、おはじきやビー玉をかき集めた。ひと通りかき集めたか、と思い、立ち上がると、足の裏に鈍い痛みを感じた。悲鳴をあげそうになりながらも、ぐっとこらえた。足を上げて見ると、拾い損ねたらしいビー玉がひとつ、床に転がっていた。

じんじんとした痛みと、未だに残るビー玉の丸くて固い感触に、こんな生活がいつまで続くのだろうと、泣きたくなつた。ああでも、泣いている場合ではない。おしめを替えたのだから、早く夕餉の支度を手伝わないと、また怒られてしまう。帰ってきたばかりだというのに、海に行きたい、と思つた。あたしが心安らかに、何かを考えられる時間は、あの崖の上で外国船を見つめている瞬間だけなのだ。

夜が明けて、いつもの通り、井戸に水汲みに出た。井戸水の冷たさに、まだぼんやりしていた頭が、一気に覚めるような心持ちがする。これを持って帰って、洗濯をしなければ。水で重たくなつた桶を抱えて、家に戻ろう

とすると、何やら辺りが騒がしい。どうしたのだろうか、と桶を置いて、声のする方向に向かった。

声のする場所は、村の盆踊りやら秋祭りやらで使っている広場で、人だかりができていた。あたしの背丈では、とてもじゃないけど、人垣の向こうにあるものを見ることができなない。爪先立ちになって、見ようとしても無駄だった。諦めて、かかとを下ろすと、隣の村のおばさんが近くに見えた。急いでおばさんの傍に寄り、「何があるんですか？」と尋ねると、おばさんはよくぞ聞いてくれました、とばかりに、にまりと笑つた。

「昨日言つた、良いものが来てるんだよ」

「良いもの……」

「見世物小屋さ。見世物小屋の一座が、来ているんだよ。もうちょつとしたら、開場だからね。皆、待っているのさ」

おばさんは、まるで子供のように無邪気に、浮かれているように見えた。周囲を見渡すと、他の大人も皆、お祭りの日のような顔をしている。そんなに良いものなのだろうか。その、見世物小屋とやらは。見世物小屋、という言葉に聞き覚えはあつたけれど、それがどういうものかは、よく分かつていなかった。おばさんに、見世物小屋とは何か、と尋ねようとしたとき、人だかりの前の方から、わあっと歓声が上がって、ぞろぞろと人の波が動

き始めた。

「開場したみたいだねえ」

嬉しそうに呟いて、おばさんもその列に続く。あたしは、その場に突っ立ったまま、人々が進むのを見ていた。それと同時に、視界が開けてきて、あたしは、人だかりの向こうに何があるのかを知った。それは、なるほど、丸太や荒縄で骨組みを作り、木の板やむしろをかぶせた、仮設の小屋だった。緑と黄と赤の鮮やかな垂幕がかかっている、火を噴いている男やら、白い着物を着た女やら、琵琶を弾いている目をつむった男やら、頭が三つある犬やら、人魚やらが描かれた看板があった。その看板にも、その横の方にも文字が書かれていたけれど、あたしは習っていないから、漢字が読めなかった。字は読めなかったけれど、絵の雰囲気からして、どことなく、怪しげなものを感ずる。その不気味さが、あたしの興味を誘った。おばさんが良いもの、と言った意味が分かるような気がした。なるほど、これは面白そうだ。中からは、時折、歓声が聞こえる。その声がまた、あたしの興味を掻き立てた。一体、何をやっているのだろう。この垂幕の向こうには、何があるのかしら？

どきどきと胸が高鳴って、中へ入ってみたいくなったけれど、一步二歩、進んだところで気がついた。あたしはお金を持っていない。母ちゃんにねだつたって、うちに

そんな余裕はない、お前が行ったら弟や妹たちまで行きたいと騒ぎ始めるじゃないか、やめとくれよ、などと言われるのが関の山だ。どう考えたって、無理に決まっている。おばさんが出てきたら、どんなことをやっていたか、後で聞かせてもらおうか。ああでも、そんなことをしたら、余計に入りたくなくなってしまうそうだ。

どこか隙間があつて、中の様子が見えたりしないだろうか。そう思いながら、小屋の周囲をぐるりと回るようにして、うろろろしていると、不意に、後ろから声をかけられた。

「入りませんか？」

びくりと肩が跳ねる。振り向くと、そこには、背の高い細身の、目元まですっぽりと包むようにした黒い頭巾をかぶった人が立っていた。女の人にしては、背が高いような気がする。男の人にしても、高い方だろう。けれども、その声は、聞き慣れた漁師の唸れ声とは違って、高く澄んでいた。顔が見えないので、判断がつかない。どちらだろうかと考えていると、もう一度、「見世物小屋、見て行きませんか？」と尋ねられた。

「お金を持っていないから、お代が払えないもの」

そう言うと、鼻から下しか見えないその人は、笑った。「私ね、この見世物小屋の一員なの。お嬢さんは綺麗だから、特別に、一回ならばお代は結構ですよ。私もこの

後、戻って芸をやるの。どうかしら？」

この人、この見世物小屋の人なのか。ぽかんとして、自分よりもずっと背の高い相手を見上げた。多分、口調や声からして女性だろう、とあたりをつける。同時に、お嬢さんは綺麗だから特別、という言葉に、自尊心がくすぐられた。入ってみたいという思いと、心地良い言葉に乗せられて、あたしはこくりと頷いた。

女の人は、「じゃあ一緒に入りましょう」と微笑んで、並んで小屋に入る。あたしは、人の隙間に潜り込むようにしながら客席へと向かい、彼女は、舞台の裏へと姿を消した。

小屋の中は、人がすし詰めになって、妙な熱気に包まれていた。薄暗く、舞台だけが明かりに照らされて、明るい。今は一体、何をやっているのだろうか。隙間から顔を出した瞬間、周囲がどっと歓声に沸いた。舞台を見ると、丸坊主の男が、宙に向かってぼおお、と口から火を吹いていた。すごい。熱くないだろうか。火傷しないだろうか。そう思いながら、自然と沸く拍手に合わせて、あたしも手を叩く。

火吹き男が舞台から退場すると、舞台の横ではつぴを着たちよび髭の男が、声も高らかに、調子をつけて口上を始めた。

「さあさあ皆様、お次はこの文明開化の時代には珍しい

ものではなくなった、西洋の娘にございます。しかしこの娘、大変哀れな育ちでございます、両親を知りませぬ。赤ん坊だった彼女は、この日の本の地に連れてこられたはよろしいが、そのまま海岸にポイと打ち捨てられてしまいました。異国の娘は、異国のこの地で、天涯孤独の身となってしまったのであります。何故わたくしが見つけることと相成りましたか、聞いて驚け、なんと彼女は、赤ん坊の頃より歌を謡えたのでございます。海岸を歩いておりますと、世にも哀れな悲しい歌声が聞こえてきて、導かれるようにそちらを探すと、歌の出処は、まだ歩けもせず、泣き喚く以外には心を表す術を持たぬ筈の、赤ん坊の彼女だったのでございます。成長した現在でも、その黄金色の髪の毛を腰まで波打たせて、哀れ彼女は故郷を懐かしみ、こうして、舞台上で歌うのでございます。さあさ皆様、どうぞご覧下さいませ」

口上が終わると同時に、舞台上に登場したのは、美しい金色の髪の毛に、碧い瞳をした、背の高い女性だった。彼女が登場すると、周囲が一斉に、息を呑むのが分かった。あたしも息を呑んだ。何せ彼女はとても、美しかったのだ。碧い色をした大きな瞳に、すつと通った高い鼻。均整のとれた眉に、整った唇。肌など、白く滑らかな陶器のようだ。身にまとう空色をした美しい衣装が、よく似合っている。まるで西洋のお人形のような。こんなに

も綺麗な人が、この世にいたなんて。

彼女は、客席に向かって静かにお辞儀をすると、高く澄んだ声で、あたしの知らない異国の歌を謡い始めた。その声に、はっとする。先程の彼女の声だ。あの黒い頭巾の下には、金色の髪の毛と、碧い瞳があつたのだ。

親切で、こんなにも美しく、歌も上手で、何てきらびやかな女性なのだろう。この人は、あたしの欲しいものを全て持っているように思われた。息を呑む程の美しさと、その歌声で人々を魅了して、ひらひらの綺麗なドレスを着て、こんなに多くの人々に熱い視線を注がれて。この人のように、あたしも自分の美しさと、何か芸をもって、皆にちやほやされる事ができたなら……。

そう思うと、もう、いてもたってもいられなかつた。おぼさんの言っていた、良いもの、という言葉を思い出す。おぼさんにとっては見世物を見ることができ、それだけかもしれないけれど、あたしにとっては、この上ない素晴らしい機会だ。この人に巡り会えたことは、きっと何か意味があるに違いない。どうすればあなたのようにになれるのですかと、あたしもあなたのようになりたいたいのですと、伝えたくて仕方がなかつた。魔法にかかったように、うっとりとした表情で、舞台を見つめるお客たち。あたしだって、きつと、あの人に方法を教えても

らえさえすれば、あの舞台に立って熱いまなざしを向けられているのは、あたしになるのかもしれないのだ。

胸がどきどきと弾んで、爪が食い込むほどに、指を握り込んだ。彼女が歌い終わって、舞台から退場するときにも、お客は皆、恍惚の表情を浮かべて、憑かれたように彼女にまなざしを送っていた。どうやらこれで、演目は終わりだったようで、ちよび髭の男の人が、「ありがとうございます」と、お辞儀をした。それを受けて、お客たちは、ぞろぞろと出口に向かって歩き出す。でもあたしは、他のお客たちと一緒に、小屋を出るつもりはなかつた。人混みに紛れるようにしながら、さつき彼女が入っていった、舞台の裏へと続く道に近づき、周囲の目に注意しながら、すばやく入り込んだ。幸い、誰にも見咎められることもなく、潜り込むことができた。

舞台の裏側へと続く通路は、客席よりも更に薄暗く、香のような匂いが漂っている。彼女は一体、どこにいたのだろう。一度小屋を出てしまつたら、もしかしたら二度と会えないかもしれない。

通路の途中には、芸に使うらしい大道具や小道具が布をかけられて置かれている。その奥の暗幕の向こうから、人の話し声がした。彼女はいるのだろうか？ そう思いながら、話し声のする、布一枚向こうの部屋を覗こうとし

た。そのとき。後ろから肩にぼんと手を置かれる感触がして、悲鳴をあげそうになった。とつさに口元を両手で押さえて、声が出ないようにする。振り向くと、そこには、黒い頭巾を被った、先程の彼女が立っていた。

「驚かせてしまったわね。どうしたの？」

怒られるかと一瞬怯んだけれど、その声は至って普通のそれで、責めるような響きも感じられなかった。怒られなかったことにこっそり安堵した後、どうしたの、という言葉に対し、なんと返すべきかと悩む。先程はいてもたってもいられないような気持ちになっていたけれど、いざ本人を目の前にすると、何から言えばいいのかわからなくて、「さ、さっきの歌い手さんって、あなたですか？」などと尋ねてしまった。黒い頭巾にすっぽりと包まれて、鼻から下しか見えない彼女をまじまじと見つめていると、彼女は、「ええ」と短く答えた。

「やっぱり。どうして黒い頭巾を被っているんですか？」

「……あまり見せたいものじゃないから」

「そんな。あんなに綺麗なのに、もったいんですよ」

彼女はちよつと微笑んだけれど、それについては、何も言わなかった。そして、「お話はそれだけかしら？」と続けられて、あたしは一瞬、口ごもる。出会ったばかりの相手に対して、とても凶々しい願いごとをしようとしているのだと、今更ながらに、意識してしまったのだ。

でも、と思い直す。この機会を逃せば、あたしがこの辛気臭い村から出ることは、二度とかなわぬ夢になってしまうのかもしれないのだ。それを思えば、どんなことだって言えるような気がした。意を決して、言葉を押し出した。

「あたしを、この一座に入れて下さい」

挑むようにそう告げると、彼女は、「どうして？」と間髪入れずに答えた。

「あたし、この村から出たいんです」

「どうして？」

「あたし、お金持ちになりたいんです。母ちゃんに怒られて、弟や妹の世話ばかりで終わる毎日なんて、もうまっぴらなんです。あたしだって、もっと良い暮らしがしたい。きつと、数年もしたら、あたしはどこかに奉公に出されてしまいます。家族のためだけに生きるなんて嫌です。あたしはあたしのために生きてみたいんです」

彼女は、黙って聞いていた。きちんと伝わったのだろうか。駄目だと怒られるだろうか。それでも、引くつもりはなかった。これが最初で最後かもしれないのだ。あたしの良い暮らしは、これにかかっているのだ。彼女は黙って、何事か考えているようだ。そして、「ちよつと待っていてね。団長に聞いてみるから」と言って、彼女は、あたしがさつき入ろうとした、人の声が聞こえた部屋へ



と入っていった。

少しして、彼女が暗幕から顔を出した。ごくり、と喉が鳴るのが分かる。あたしは、全身が一つの心臓になってしまったのではないかとさえ思った。それぐらい、緊張していた。

「団長は、良いと言ったわ」

「ほ、本当ですか!？」

彼女の声は静かで、けれども、あたしはその声の静かさとは対照的に、思いきり声を弾ませた。喜びで、胸があふれる。だから、「ええ。でも、これから私の言うことをよく聞いて、その通りにして欲しいの」という言葉にも、大きく頷いて、「はいー」と答えた。

「公演の最終日の夜更けに、もう一度いらっしやいな。そのときに、正式に入団することになるわ。何も持たないで、身一つで大丈夫よ。団長が後で、親御さんにはうまく説明してくれると言っているから、あなたは安心して、こちらへ来て」

「はいー!」

「ただし、このことは出発するまで、絶対に誰にも言わないこと。別れの挨拶もいけない。そうでなければ駄目だと、団長は言っているわ」

「どうしてですか？」

「色々と言われてしまうから。そういう余計な噂は、興

行の邪魔になるわ。あなただって、村の人に引き止められたくはないでしょう?」

なるほど、と納得して、彼女の「約束よ」という言葉に、しっかりと頷いてみせた。すると、彼女は笑って、「ようこそ、うちの一座へ」と言った。あたしはその言葉を、めまいがするほど嬉しいと思った。お辞儀を一つして、あたしは、くると身を翻し、出口へと向かった。

早く、早く最終日になるといい。もうすぐこの村を出られるんだ。期待と嬉しさとで、胸がいつぱいになる。胸の鼓動と一緒に、足も跳ねる。気がつけば駆け出していった。約束、絶対に、誰にも言わない。その言葉を心に抱き締めて、あたしは足取りも軽く、見世物小屋を後にした。

少女が一人、海辺の村から消えた。

消えたことが発覚した日の朝、うちの娘がいないのだと、寝床はすっかり冷えちまってもぬけの殻なんだと、母親が慌てた様子で近所中に聞いて回ったものだから、少女が行方不明になったという噂は、あつという間に村中に知れ渡ることとなった。一体どこへ行ったのか、皆目見当がつかぬ。村中の手が開いている者が総出で捜索

## 草介の章

したもの、結局、八つ時を過ぎても見つからない。いよいよ行方不明らしい、ということが明らかになると、母親は、わっと両手で顔を押しさえて、泣き崩れた。

海辺の村では、忽然と消えてしまった少女の話題で、持ちきりだった。

「あの子、岩場の方に立って、ときどきぼうっと見つめていたから……」

「足を滑らして落ちたんじやないのか？」

「今、漁師のとつあんたちが、船を出して、海を探してるよ」

「でも、岩場から足を滑らして落ちたなら、岩の方に血の痕がついてるんじゃないのかい」

「いや、ついてなかった。だけど、ひよっとしたら高波で洗い流された、ということもあるかもしれない」

「まだそうと決まったわけでもねえのに、奥さんの聞こえるようなところで、滅多なことを言うんでねえよ……」

少女の名前は、五月と言った。巡業を終えた見世物小屋のことは、誰の頭にもないようだった。

少年の名前は、草介と言った。

少年は、広い座敷に敷かれた座布団の上にふんぞり返って、女中に怒鳴りつけている最中であつた。持ってきたおやつが、気に入らないと言っているのだ。この前も言つただろう、おれはこれが嫌いだって。一体、いつになつたら覚えるんだ。噛み付くような剣幕に、女中は、一回りも下の少年を前にして、すっかり縮こまっていた。すみません坊ちゃま。申し訳ございません。次からは気をつけます。どうぞお許し下さいませ。畳に額を擦りつけるようにして、ぶるぶる震えながら、女中は繰り返し謝罪の言葉を口にした。しかし、草介はますます猛り狂って、女中を激しく罵つた。

一体どうして、この女はこんなにも物覚えが悪いのだろう。どうしてこんなに愚図で鈍間で、いちいち自分の機嫌を損ねるのだろう……。

腸が煮えくり返るような思いで、草介は罵り続けた。その内に、だんだんと喉もかれ、口が渴いてきた頃。既に怒りは収まってきていた。しかし、ぶるぶると小動物のように震えながら、お許し下さい坊ちゃま、とか細い声で繰り返し返す、自分より一回り年上の女の、哀れな様子が、どうしようもなく可笑しく感じてきたのである。も

はや、お気に入りの菓子でなかったことなど、どうでもよかつた。ただ、この女中の、無様なさまをもっと見ていたくなつたのだ。くつくつと喉の奥からこみ上げてくる笑いを、怒声に乗せながら、草介はいよいよ興に乗つて、荒々しく女中を罵つた。地団駄を踏みながら女中を指さして怒鳴つてやると、足を踏み鳴らす度に女中がますますおびえるのが、可笑しくてならなかつた。

じりじりと近寄つてやると、女中もじりじりと後ろに下がつた。それをしばらく繰り返して、とうとう、女中を座敷から蹴り出してしまつた。地べたにべつたりと這いつくばる形になり、着物は土にまみれてしまつてゐる。女中は涙ぐみながら立ち上がり、そのまま、わつと門へ向かつて駆け出した。その後ろ姿を、草介は、何とも残酷な笑みを浮かべて見送つてゐた。そうして、その後ろ姿が門の向こうに消える頃、満足気に座敷に戻り、座布団にふんぞり返るのであつた。



おれは退屈だ。おれは退屈なんだ。ああ、とつても退屈だ！

「なあ、退屈だ。相手をしろ」

そう声をかければ、女中の一人であるハルは、一瞬怯

えたような顔をする。でも、おれには逆らえないものだから、ぐつとこらえて、作り笑顔を浮かべる。そして、気持ちの悪い猫なで声で、「坊ちゃん、何をして遊びましょうか？」と、おれに尋ねるのだ。おれは、「じゃあ、お馬ごつこだ。お前、四つん這いになって馬になれ。おれが乗つて、家中を走るぞ」と提案する。すると、ハルは顔を曇らせて、「そんな、坊ちゃん。そんなことをしたら、私が旦那様にお叱りを受けてしまいます。どうぞ、別のお遊びにして下さいませ」と言うのだ。「おれがその遊びをしたいって言つてるんだ。おれの言うことが聞けないのか。おれの言うことを聞けないなら、泣き喚くぞ。そしたら、お前はあつという間にこの家を追い出されてしまふだろうさ」とさえ口にすれば、観念したようにおずおずと四つん這いになって、おれに乗るようになるのだから、最初からうんと言えればいいのに。

満足してハルの背中に乗り、「さあ、出発だ。早く走るんだぞ。何しろ馬なんだからな」と声をかければ、ハルは、その顔を真っ赤にし、髪を振り乱して、必死でペたペたと音を立てながら、板張りの廊下を歩き出す。でも、本物の馬に比べてずっと遅いものだから、おれは背中で跳ねるようにしながら、「馬、遅いぞ。そんなことでどうする」と言いながら、足のかかとでハルの横腹を蹴つてやるのだった。ハルはその度に、うつと息の詰ま

ったような声をあげ、苦しげに俺を見上げる。「ほら、止まってるぞ」と促せば、またのろのろと進み出す。それを遅いとおれが怒る。その繰り返しをして、雑巾がけしたびかぴかの木張りの床に、ハルのあかぎれた指から滲んだ血がこすれているのを見て、これはどういふことだとおれの親父が怒る。そして、ハルが怒られる様子を、満足して眺めるのだった。

ただ、最近では、ハルで遊ぶのも飽きてきた。おれの最近のお気に入りには、うちの料理を担当しているキヨの息子、吾一だった。おれよりも三つ年下のそいつは、おれに嘘の笑顔をすることもない。猫なで声で媚びたりもしない。ただ、怯えた顔をして、後ずさるだけだ。母親が住み込みで奉公しているもんだから、そいつも必然、うちに住まないといけない。おれには兄弟はおらず、また、おれはよその貧乏な家のように、寺に勉強に行くのではなく、家で先生をつけてもらっていた。外にはたまのお出かけ以外では出る用事がなかったし、同じ年ぐらいの男の子と知り合う機会がなかったのだ。外に出たって、家にいる方がまだましぐらいのもので、大して面白いと思っていなかったのも事実だ。

古参の女中であるナツを外に誘っても、呼ばれればすぐにお仕事に戻らなければなりませんので、それでお給金を頂戴しておりますので、と言われてしまう。全くつ

まらないと思っていた矢先に、おれの屋敷に住み込みで、親子揃って転がり込んできたのだ。最初は、キヨの方で遊んでやろうかと思ったが、年増だったこと、厨房付でおれの前に姿を見せる機会が少なかったこと、また、その後ろに隠れるようにして顔をのぞかしている息子の方が、おれの気に入ったのだった。おれはそいつを連れて、外に遊びに出るようになった。おれのお気に入りの遊びは、かくれんぼだった。吾一を鬼の役にして、絶対にちびの子供には見つけられそうにないところに隠れては、夕暮れ時になっても見つけられずに半べそをかいている様子を見るのが、おれの楽しみになった。もう一つのお気に入りの遊びは、鬼ごっこだった。勿論、鬼ごっこだつて、鬼はいつもあいつだ。

「お前、鬼の役をやれ」

「は、い」

「鬼なんだから、お前をおれが退治しないといけないんだ。おれが桃太郎だ」

そう宣言して、棒切れを持って「ええい、この悪い鬼め。このおれが成敗してくれる」と言いながら、泣きべそをかいて必死で小さな足を動かしている吾一を追い掛け回すのが、楽しくて仕方がなかった。吾一が来てから、おれは外で遊ぶことが好きになったし、新たな楽しみを増やすことができた。

おれたちの遊び場は、近所の小さな神社の境内が多かった。神主はいることにはいるが、普段は村の自分の家において、神主の仕事をするのは、行事ごとの時ぐらいた。誰に咎められることもなく、静かな境内の中でおれと吾一は遊んだ。

その神社の裏の山は、しめ縄が張り巡らされていて、子供は、入ってはいけないことになっていた。神域、とかいうらしい。山に入りたいと言ってみたことはあるが、珍しくお父様に「ここには子供は、絶対に入っちゃいかん」と厳しく諫められたので、興味を引かれながらも、実際に入ろうとはもう、思っていなかった。ただ、その山に入る真似事をする、吾一がおれの手を掴んで、必死で引きとめようとするのが面白くて、行く度に真似事をしてやった。その様子は、以前ハルに「神社の裏へ行きたい」とねだったときと似たようなもので、揃って同じような反応をするのも、面白かった。ときどき、「お前が入ってみろよ」などと笑って言っていると、怯えて家に駆け戻っていくのを見るのが、おかしくてならなかった。

今日も神社で遊ぼうと吾一を連れて外に出ようとする、と、ナツに呼び止められた。

「坊ちゃん、今日は神社では遊べませんよ」

「何故だ」

多少の苛立ちを覚えてナツに問い返すと、ナツはおれたちを見て、

「今日は神社に見世物小屋が来ているのでございます。ですから、神社でかくれんぼや鬼ごっこはできませんよ」

「見世物小屋？」

「ああ、坊ちゃんは初めてでしたか。見世物小屋というのは、色んな珍奇なものや芸を見せる一座のことで、その一座がこの村に巡業に来たのでございます」

「へえ」

「ですから、今日は別の場所でお遊びなさいませ。吾一も分かりましたね」

「は、はい」

吾一がおどおどと頷くのを見て、ナツは家の中へ入って行った。おれは、ナツの後ろ姿を見送ってから、吾一に「行くぞ」と声をかけ、そのまま外に出た。吾一が、「坊ちゃん、どこへ行くのですか」と声をかけてきたので、「決まっているだろう。その見世物小屋とやらを見に行くのだ」と答えてやる。吾一は驚いて、「でも、先程駄目だと言われたばかりです」と言った。「馬鹿者。かくれんぼや鬼ごっこをするならば神社で遊んではいけないと言われただけだ。見世物小屋を見るな、とは言われていない」と答え、そのまま神社へと入る。

ただ、ナツのあの様子を見る限りでは、おれにあまり

行つて欲しくないと思っているのは明らかだった。家の者に言うとは面倒なことになるような気がしたので、このことは言うまいと心に決めた。吾一はもう何も言わず、黙つてついてきた。

神社は、大勢の人間で賑わっていた。境内の真ん中には、丸太と木の板を組み合わせてできた、簡素な小屋が建つていた。赤と緑と黄色の垂幕が小屋をぐるりと取り囲むように覆い、看板には、人魚だの、人面犬だの、琵琶法師だのが描かれていた。境内はまるでお祭りの時のようで、皆が高揚した様子で騒がしい。人が集まっている方を向くと、ドンドンという太鼓を叩く音に合せて、黒い頭巾をかぶった人間が一人、呼び込みをしていた。

「よあさあ寄つてらっしゃい見えてらっしゃい、そこ行くお坊ちゃんにお嬢ちゃん、おじいちゃんおばあちゃんにお父さんにお母さんも、御用とお急ぎでない方はお立ち会い。本日こちらにお目見えするのは人は人でもそんなよそこの人とはちと訳が違う。なんと、かの霊峰高野山で300年もの修行を重ね、火吹きを習得したというから驚きだ。さてさて、うるさい前口上はこの位にして、それではいよいよ本邦初公開、火吹き男の登場でございます」

その言葉と共に、わあわあ、と入り口から入っていく村人を見て、あつげにとられていると、黒ずくめは、こ

ちらに近づいてきた。

「その坊ちゃんたちも、見て行きませんか」

背が高いから、細身の男かと思つていたが、声からして女だったらしい。吾一は、黒頭巾にすっぽり覆われているさまが恐ろしいのか、「ヒツ」と小さく悲鳴をあげて、後ずさつた。こいつ、逃げようとしてやがる。そうはさせまいと、吾一の手を乱暴につかむと、吾一は、びくりと身体を震わせ、おれの顔を涙をためた瞳で、うかがうように見つめた。おれは、吾一の訴えてくるような瞳を無視して、女に向き直つた。

「入る。でもおれは、お金は持たせてもらつていないんだ。後でお前、お代をおれの家に取りに来い」

そう言うと、黒頭巾の女は、少しの間黙つて、おれたち二人を見つめた。まるで頭巾の向こう側から品定めをされているような奇妙な感覚があつて、不愉快に思つた。が、その不愉快さは、女の次の言葉で掻き消えた。

「坊ちゃんたちは、お金がなくても結構ですよ。お二人とも、一度だけなら、特別に」

と、柔らかな声で、おれと吾一に言った。

なるほどこの女、商人らしく賢いじゃないか。先程のじろじろと見られているような感じは、おれたちの身なりを見ていたらしい。どうやらおれが金持ちの息子だとわかつたようだ。おれにはごまをすつておく方が得策だ

と考えたのだろう。吾一まで夕夕にすると、おれの家来にも親切にしておく方が良いという心づもりだろうか。

おれは、「それならそうと早く言え。さあ、行くぞ吾一」と、吾一を引つ張った。小屋の入り口にある、おどろおどろしい看板の絵が恐ろしいのか、吾一はますます泣きそうになりながらも、ついてきた。吾一に、「おれのおかげで、お前みたいな貧乏人の息子でも、この見世物小屋に入れるんだ。ありがたく思え」と言うと、吾一が黙っているの、「ありがとう、と言えないのか。お前の母親はそんなしつけないのか」と怒鳴った。「吾一は、蚊の鳴くような声で、「ありがとうございませう」と呟いた。それを聞いて、「それでいいんだ」と、おれもやっと満足した。

小屋の中に入ると、丁度、火吹き男が火を吹き始めたところだった。芸に間に合ったことに満足して、吾一と二人並んで、男が火を吹いている様子を見た。火吹き男は、髪の毛に火が燃え移らないようにするためなのか、丸坊主だった。小屋の中は大勢の人がいるせいか、はたまた火を扱っているせいか、蒸し暑い。舞台上に立つ男は、本当に火を口から吹いている。片腕の長さほどはありそうな火を、ぼおっと吹いている。一つ吹き終わると、腰に下げているひょうたんから何やら液体を口に含み、

また火を吹く。時には長く、時には短く。なるほど、これは一体どうやっているのだろうか、と感心した。

けれど、ふと横を見ると、吾一が感嘆した様子で火吹き男を見つめているのが、何だかとても腹が立った。周囲を見回せば、どいつもこいつも、舞台の上の火吹き男を、同じようにぼかんと口を開けて、見入っている。胸にむかむかときみ上げてくるものを感じた。面白くない。芸が終わり、火吹き男がお辞儀をすると、皆が一斉に手を叩く。誰も彼もが満足そうな顔をして、出口からぞろぞろと出て行く。口々に、「すごかったね」だの、「どうやっているんだろう」だの、「あんなことをできる人はなかなかいやしないよ」などと言い合っている。それがますます面白くなかった。

さつきは感心したが、よくよく考えてみれば、火を吹いているからなんだと言うのだ。どいつもこいつも、あんな男のくだらない芸にいちいち驚いて拍手をして、ばかりじゃないのか。あれぐらいのこと、少し練習すれば、おれにだってできるはずだ。

小屋から皆が出て行くのを見届けてから、おれは、先程あいつの消えて行った舞台裏に続く道へと回った。吾一も皆に続いて、小屋から出て行くとしていたが、おれが引き止めた。しんとした、薄暗い小屋の中にいつまでもいるのが嫌なのだろう、吾一は泣きそうな顔をして、

「坊ちゃん？」とおれを呼んだが、無視して、ついてこいと合図した。吾一は一瞬ためらう様子を見せたが、おとなしくついてきた。

すると、ちょうど控えの部屋から出てきた火吹き男と鉢合わせになった。瞬間、酒の臭いが辺りを漂い、うつと息が詰まる。火吹き男は、おれたちを見て、まだ小屋から出ていなかったのか、と言いたげな顔をして、出口の方を指さそうとした。それをさえぎるように、

「お前、おれに火吹きのやり方を教えろよ」

と、言った。火吹き男は、面食らったのか目を瞬かせて、要領を得てないようだった。

「なんだア？ 餓鬼はこんなところにや来るもんじゃねえぞ」

「聞こえていないのか。おれにさっきの芸のやり方を教えると言ったんだ。何度も言わせるな馬鹿者」

男は思い切りわずらわしそうな顔をしながらも、少し興味が湧いた、とでも言うようにおれを見つめた。

「おめエの親御さんは、目上の人間に対する口のきき方も教えてくれなかったのかい？ 随分上からな物言いをするんだな」

「目上の人間に対しての礼儀なら教えてもらった。お前は目上の人間じゃないじゃないか」

ぶんぶんと漂う、酒の臭いがひどい。育ちの悪さを感じさせる言葉遣いにも、眉をひそめた。

「おれは確かに酒呑みだし学もねエが、おめエさんよりも人生をちっとばかり長く生きてるし、自分でこうやって芸をして生計を立ててる。おめエさんよりも下に見られる覚えはねエや。おめエさんに教えるもんなんざねエ。とっとと家に帰んな」

「なんだと？」

「教えるもんはない、とっとと家に帰れと言ったんだ。何度も言わせるんじゃねエ」

そう言いながら、腰に下げているひょうたんの口を開け、仰いだ。ひょうたんには酒を入れてあるのか、ぐびぐびと呑む度に男の顔は赤く染まり、吐く息はますます酒臭くなった。

「俺はなア、おめエみてえに自分だけじゃ何もできねえくせして、一人で何でもできるような顔して偉そうにふんぞりかえってる奴が、一番嫌いなさ」

「おれは飲み込みが早いと先生もいつも言っているぞ。坊ちゃんは大層立派になると言われている」

「それじゃあ、その先生とやらも見るとねエ、くだらない人間なんだろうよ。おめエもそんなのが先生でかわいそうにな」

「知りもしないくせに偉そうな口叩くな」

「その言葉、そのままそっくりお前に返してやらア」



なまりの強い、下品な言葉遣いの割には、口の立つ奴だ。おれを見ても吾一やハルたち村の人間のようには怯えたりしない、それどころか小馬鹿にしたような顔をしているのが気に入らなかつた。村の人間ではないせいだろうか。いやいや、そんなことはない、と思ひ直す。先程の黒頭巾の女を思い出したからだ。おれが立派な家の息子だと分かれば、こいつだつて少しは考えるだろう。

「おれはここにだつて、特別扱いで入つたんだ。黒頭巾の女に、お代はいらないと言われたんだぞ」

途端に、火吹き男の目つきが変わつた。やつとわかつたのか、この痴れ者が。信じられない、とても言うような目でおれを見つめてくるので、ふふんと鼻を鳴らしてやると、火吹き男は、丸坊主の頭をがりと掻きながら、ため息をついた。

「はあ……、有須は何だつてこんな糞餓鬼を選んだのかねエ」

「は？」

「何でもねエよ。それより、わかつた、わかつたよ」

酒の入っているらしいひょうたんを振りながら、男はにやりと笑つて、そして、言つた。

「本当にお前一人でできると思つてんならよオ、公演の最終日の夜に、誰もつけずに一人でやつてきな。最終日の夜じゃねエとおれの手が空かねエからな。わかつたか

い、お坊ちゃんよオ」

話はずつた。おれは笑つて、「わかつた。最終日だな」と答える。そして、「行くぞ、吾一」と、後ろの方で所在なげに立っていた吾一に声を掛け、小屋を出た。帰りの道中、「坊ちゃん、火吹き男の芸をなさるおつもりなんですか」と驚いたように尋ねる吾一に、「ああ」と返す。「すごいです」と素直に感心しているらしい吾一は、自分には全く関係ないという態度だ。それに呆れた。

「お前、最終日の夜、おれについてこいよ」

「えつ。でも、さっきの人、坊ちゃん一人で来いと言つていたのではなかつたですか」

「お前、おれをまさか本気で一人で行かせる氣だつたのか。何を考へているんだ？見世物小屋のお代だつて、おれが金持ちの息子だとわかつたからこそ、ごますりにタダにしてもらつたんだ。お前がおれについてくるのは当然だ」

氣の乗らななさうな顔をして、もじもじとうつぶいている吾一に、苛立つた。こいつは一体何を考へているんだ。あんな奴の言いなりに、どうして一人で行かないといけないんだ。そもそも一人で行かせてもいいと思つているところが、全く氣に入らない限りだ。ふんと鼻を鳴らして、歩き始めると、慌てたように小さな足音がついてきた。そうだ。それでいいんだ。

最終日の夜には、こいつを小屋の外で待たせておいて、火吹きを教わった後に、こいつの前で面白おかしく披露してやろう。こいつに向かつて火を吹く真似をしてやっても楽しそうだ。さぞかし怯えて、逃げ惑うだろう。いや、その前に、あの男に目にも見せてくれる。驚いた顔をして、土下座でもさせてやりたい。おれにはどうせできやしないと高をくくっているようだが、そうはいくものか。楽しい想像に、おれは口元がゆるむのを感じていた。

公演の最終日の夜が、今から楽しみだ。



少年が一人、山奥の村から消えた。

村の地主の息子がいないとなれば、もう屋敷はてんやわんやの大騒ぎ、あの箱入り息子がいなくなつたとの噂は、あつという間に村中を駆け巡つた。少年の父は家の者にも、村の者にも言いつけて探させた。しかし誰一人として、心から心配し、やる気を出して探すものなどいなかつた。むしろ、偉そうにふんぞり返つて、色んな人に冷たく当たつていたからついに天罰が下つたのじゃないのかなどと、大きな声では言わないが、ひそひそと囁かれていた。

ただ一人、少年がどこへ行つたのか、行方を知っている男の子はいたが、結局、そのことを誰にも言わなかつた。何故引き止めなかつたと大人たちに責められることを恐れ、また、いじめられていたが故に、少年がいなくなつたことに一番、安堵していたためだつた。搜索を始める直前に、母親と、

「坊ちゃん、どうしたのかねえ。いつも通り布団に入つてらしたのに。お前、何か心当たりはないのかい」

「わ、わからねえ。知らねえ……」

「そうかい。そりやそうだよねえ。本当に、どこに行かれたのかねえ……」

こんな会話をした以外には、誰にも何も尋ねられることはなかつた。

「神社の裏手の山に入つたんじゃないでしょうか。坊ちゃん、入りがつておりましたので」

という、一人の女中の意見により、間もなく、神社の裏手の山へと搜索隊が出された。男の子は、山へと入つてゆく搜索隊を見送りながら、思い出していた。昨夜の、黒い頭巾を被つた女性との会話を。

「お帰りなさい。あなたは、ここにいきべきじゃない。そして、このことは黙っておきなさい。そうすればあなたはもう、嫌な目にあわされなくて済むから」

「坊ちゃんは……」

「あなたが気にすることじゃないわ。あの子は自分の意志でここへと来た。あなたのせいじゃないのよ。このことは、忘れてしまいなさい」

どうするべきかと迷ったが、女性の強い眼差しと、あなたのせいじゃない、という言葉に押されて、一歩下がった。

「さあさあ、早く。あの少年が、あなたが一緒にいないことに、気が付かない内に」

その言葉を皮切りに、屋敷に向かって一目散に駆け出した。田んぼのあぜ道を縫うように走って、屋敷に着くまで、一度も振り返らなかつた。屋敷に戻ると布団にぐるまっつて、震えながら一晩を過ごした。いつの間にか眠ってしまったようだが、母親の、「吾一、起きな。坊ちゃんがいなくなつたそうだよ」という言葉に起こされたのだつた。

いつもの遊び場を搜索するふりをしながら、坊ちゃんはどうなるのだろう、あの見世物小屋はどうなつただろう、と思う気持ちがないわけではなかつたが、男の子は、もう、自分がかくれんぼの鬼になつても、見つけなくても済むことに、久方ぶりに心が安らぐのを感じていた。もういいかい、と、そつと呟いてみたが、当然、誰からの返事もない。気が抜けたように、へたりとその場に座り込んだ。

いつも怯えていた。まあだだよ、と言われる度にまだなのかと緊張し、もういいよ、と言われる度に泣きたい気持ちになつた。もう、どちらの返事を聞く必要もない……。

少年の名前は、草介と言つた。巡業を終えた見世物小屋のことは、一人の男の子を除いて、誰の頭にもないようだつた。

## 武雄の章

少年の名前は、武雄と言つた。

少年は、薄暗い明かりの中、一生懸命に内職をする母の背中を、じいっと見つめていた。時折、自分の身体を見下ろしては、悲しそうな顔をして、また母の背中を見る。その繰り返しであつた。武雄は、母を手伝うことの叶わぬ身の上を、嘆いていた。

武雄には、腕と足がなかつた。手足を持たず生まれてきた武雄は、ただの木偶の坊だと自らを責め、落ち込んだ。ただ、お母さんごめんさい、と言う度に、母が、お前は何にも悪くない、私の方こそお前を五体満足に産んであげられなくてすまない、涙を流しながら武雄を抱き締めるので、武雄は母を泣かせないために、最近

そのことを口にすることもできなくなっていた。心の中で、はんでんを着た母の細い背中に、詫びるばかりであった。不具者の家族であるということ、武雄の一家は、村の人間から敬遠される存在となっていた。あんな子供が生まれるのは、前世の行いが悪かったからだの、神罰が下るようなことをしたんじゃないかだの、有ること無いこと、ひそひそと噂をされて、村の隅っこで、武雄と、母と兄は、身を寄せ合うようにして暮らしていた。父を炭鉱の崩落事故で亡くしているため、一家の家計を支えているのは、母と、今年から父と同じように炭鉱で働くこととなった兄であった。

自分は水汲みの一つもできず、内職さえもままならない。うちが村人から腫れ物に触るような扱いを受けているのも、自分の手足がないせいだ。兄さんが、炭鉱で働かなければならないのも、動けぬ自分の分まで稼がなければならぬという、兄さんの決意ゆえだ。お母さんも自分も、あれほど反対したのに、兄さんは、いつまでも母さんばかりに苦しい思いをさせるわけにはいかないから、と笑った。全て自分が悪いのだ。自分さえいなければ、お母さんも兄さんも、もっと幸せに暮らせたはずなのに……。

武雄は、母の背中を見つめながら、申し訳なさと、人のように働けないもどかしさを思い、静かに目を伏せた。



「……そうして、二人は幸せに暮らしました。めでたし、めでたし」

そう言ってお話を締めくくると、二人の子供は、ぱあつと明るい顔になって、手を叩いた。そして、「幸せになつてよかつたあ」と、胸を押さえて、ほっと息をついている。その様子を見て、口元が緩む。かわいらしいものだ。もしおれに、弟や妹がいたら、こんな感じだろうか。

「千代ね、お兄ちゃんの作るお話がだいすき！」

「ぼくも、ぼくも！」

「勇ちゃん、まね、しないでよ」

「なんだい。千代ちゃんの方こそ、まねしてるんじゃないのか」

おれの座っている椅子にびたりとくっついて言い合うものだから、手に力がこもるのか、ギシギシと椅子が揺れた。「まあまあ」となだめてみるが、二人はふくれっ面を突き合わせて睨み合っている。二人の小さな頭を見て、ふと、悲しくなる。おれに手があつたなら、二人の頭をなでてやって、抱き寄せてやれるのに。おれは、なだめるにしても、言葉以外を使えない。それがとても、

つらいと思つた。

「武雄お兄ちゃん、どうしたの？」

「えっ？」

沈んだ顔をしてしまつていたらしい、気がつくくと、二人がおれの顔を心配そうに覗きこんでいた。慌てて笑みを作り、「何でもないよ」と言うと、安心した顔をして、

「ねえねえ、お兄ちゃん、また新しいお話してくれる？」  
 と言う。「もちろん」と返すと、「やつたあ！じゃあ、また明日ね！」と言つて、二人の子供は、家から出て行つた。「うん、また明日」と声をかけると、こちらを向いたまま、しばらく手を振つていた。手を振り返してやりたいけれど、おれには無理な話だつた。

ため息をついていると、「ただいま」と声がした。玄関の土間を見ると、母さんが野菜の入つた籠を持つて、草履を脱いでいるところだつた。

「おかえり」

「ああ。今日の夕飯の材料、買ってきたよ。ご飯の支度をするから、ちよつと待つていてね」

おれに向かつて笑いかけて、母さんは台所へ向かう。きびきびと明るく、いつも笑顔を絶やさない母さんは、おれが生まれるまでは、村の中でも、たいそう人気者だつたようだ。たくさんの男の人から求婚されたのだと、その中で父さんを選んだのだと、いつかけらけらと笑い

ながら話してくれたつ。父さんがいて、兄さんが生まれて、幸せだった家、けれども、おれが生まれてから、うちの生活は変わつてしまつた。心ない村人の言葉からおれを守るために、家族は皆、自分のために、随分と骨を折つてくれた。

一昨年、炭鉱の崩落事故で父さんが亡くなつてから、我が家はますます貧しくなつた。貧しさから、村の端っこのおばら家に住むようになって、村の人とは、母さんは買い物、兄さんは仕事ぐらいでしか、会うことはなくなつた。母さんは得意の裁縫で内職をして、「これだつて楽しいんだから」と笑い、兄さんはおれたちの反対を押し切つて、今は炭鉱夫として働いている。全ておれのせいでこんなことになっているのに、一体どうして、母さんも兄さんもおれのためにこんなにしてくれるのだろうか。台所で野菜を切つている母さんの背中を見ながら、おれは、どうしようもなく齒がゆい思いにとらわれるのだった。

次の日。いつものように、千代ちゃんと勇ちゃんがやつてきて、一緒に遊ぶ。おれのお話が終わると、千代ちゃんも勇ちゃんは、「あのね、武雄お兄ちゃん。今日は見世物小屋つていうのが、村に来てるんだよ」と口をそるえて言つた。「見世物小屋？」と尋ねると、「何か、面白いものがいっぱいあるんだつて」と千代ちゃん。「よ

くわかんないけど、広場に小屋が建っていて、太鼓の音がしていたよ」と勇ちゃん。

「そうか、楽しそうだね。見に行くの?」

と尋ねると、千代ちゃんと勇ちゃんは、何やら目配せし合っている。首をかしげると、二人はにっこり笑って、外を指し示した。二人の指す先を見ると、農作業で物を運ぶときに使う、一輪車があった。

「わたしのおうちから、持ってきたの。二人で運んできただよ」

「これがあれば、お兄ちゃんを乗せて行けると思ってる」

「一緒に見世物小屋、見に行こう?」

大変だっただろうに、おれのために、一輪車を運んできてくれたのだ。じんわりと、目頭が熱くなった。でも、見世物小屋を見に行くとなると、村の人間に会わないわけにはいかない。それがばれると、二人も叱られてしまう。そう思っ、気持ちはあるがたいけれど、と言おうとした、そのとき。

「千代!勇ちゃん!」

という、女の人の声が響いた。途端に、弾かれたように「お母さん!」と千代ちゃんが、「おばさん!」と勇ちゃんが、そちらに目を向ける。千代ちゃんのお母さんが、そこに立っていた。「一輪車を持ちだしているところを見かけた、って聞いたから何かと思えば……。ついてき

て良かったわ。ときどきいらないと思つたら、ここに来ていたのね」と、二人に、ひどく怒った顔をしている。千代ちゃんと勇ちゃんは、少し怯えた風だったけれど、負けじとおばさんを見つめる。

「お母さん、どうしてここに来ちゃだめなの?武雄お兄ちゃんはいっぱい、お話してくれるよ」

「そうだよおばさん、お兄ちゃんは危なくないよ。とっても優しいんだよ」

「二人共。いいから、帰りますよ。もうここには来ちゃいけません。見世物小屋を一緒に見に行きましょう。勇ちゃんのお母さんも勇ちゃんを探していますよ」

「お母さん、見世物小屋、武雄お兄ちゃんにも見せてあげたいの!そのためにあの一輪車、持ってきたんだから!」

「ねえおばさん、お願いだよ」

「そんなことは、ここのおうちの人に任せておけばいいんです!さあ二人共、帰りますよ」

いつかきつと、こんな日が来るだろうとは思っていた。追いかけてたくても、おれには足がない。こちらに向かつて伸ばされる小さな手をとりたくても、おれには腕がない。ただ、いつもの椅子の上に座って、引きずられるようにして連れて行かれる二人を、見つめていることしかできなかった。

千代ちゃんと勇ちゃんは、いつもおれの家に遊びに来てくれていた。最初のきっかけは、よくある子供の遊びだった。あのあばら家には、お化けが住んでいると、幼い子供たちの間で噂になっていたらしい。何故近づいてはいけないのか、大人たちに尋ねても皆一様に口をつぐんだまま、誰も答えてくれなかったので、いつの間にか子供たちの間で怪談話となつて、おもしろおかしく話されていたようだ。ほとんどの子供は、大人たちにあのあばら家には近づいてはいけないと厳しく言われていたことと、お化けの噂とで近づこうとしなかったようだが、二人は、その噂を聞いて、のぞいてみたくてたまらなくなつたらしい。

ある日、そうつと窓からのぞいていた二つの頭と、おれは、目が合った。きやつと叫び声をあげて、二人は一度しやがみこんだが、おれが何もしないので、また、そうつと頭を出した。そして、千代ちゃんが、おそるおそる、「あなた、お化け？」と聞いてきたのだつた。おれは何だかとてもおかしくて、「いや、君たちと同じ、人間だよ」と笑つた。笑いかけたことで、少し緊張がほどけたのか、勇ちゃんが、「うそだ。じゃあ何で、腕と足がないんだ」とかみつくように、おれに言った。

「これは生まれつきなんだ。ときどき、目が見えない人や、耳が聞こえない人がいるだろう。それと同じで、お

れには手足がないんだよ」

「だまされないぞ。そうやって、うそついて、おれたちをとって食うつもりなんだろう」

「とつて食おうにも、手がないんじやつかまえてもいられないし、足がないんじやつ走って追いかけることもできないよ」

そこまで言つて、ようやく近づいてみようという氣になつたらしい。そろそろと玄関から入つてきて、二人はおれの前に立つた。こわごわとおれの肩や太ももあたりを触り、そこから下がないことに驚きながらも、おれが何もしないで笑つているので、安心したようだった。それが始まりで、おれたちは一緒に遊ぶようになった。

千代ちゃんと勇ちゃんは、おれよりも四つ年下だった。おれは何もすることがないので、頭の中で考えていた物語を、毎日一話ずつ、二人に聞かせた。二人は、学校で習っている教科書を持つてきて、おれにも今日はどういうことを習つたのだと教えてくれた。兄さんのお古の教科書を使つて、家で勉強していたので、二人が分からないと訴えるところを、教えてやることもできた。千代ちゃんと勇ちゃんは、おれにできた、初めて友達と呼べる人間だった。

でも、やはり、おれには友達なんて、高望みというところか。

千代ちゃんのお母さんの自分を見る目は、まさにお化けを見るそれであった。村の人間に、どう思われているかなんてとづくに知っていたので、今更どうということはないけれど、その眼差しを改めて見ると、傷つものだなあなどと一人考えた。

千代ちゃんと勇ちゃん、ひどく叱られていなければいけれど。あの劍幕では、叱られているだろうな。それを考えると、またおれのせいで、とうなだれた。おかげで、兄さんが仕事から帰ってきたことにも気がつかなかった。「武雄？」と名前を耳元で呼ばれて、ようやく、はっと顔を上げる。兄さんは、「ただいま」と笑い、「武雄が帰ってきたことに気が付かないなんて、珍しいな。いつも、玄関に着くか着かないかの辺りでは気がついてるのに」と言った。すずで顔まで真っ黒に汚れた兄さんは、手と顔を洗いに、台所へ向かった。そして、手ぬぐいで顔を拭きながら、こちらへ戻ってくる。どっかとおれの横に腰を下ろして、「何かあったのか」と優しく尋ねた。

おれは、仕事から帰ってきて、疲れているであろう兄さんに、これ以上心配をかけたくなかったので、首を振った。そして、「今日そういえば、見世物小屋が来ているんだらう？見に行かなかったの」と尋ねると、兄さんは驚いた顔をして、「よく知っていたなあ。でもあんな

の、ちゃんなものさ。大したものじゃないさ」と笑った。嘘だ、と思う。兄さんは祭などのにぎやかな行事ごとが好きだ。本当は、見に行きたいんじゃないのか。おれが見に行けないのに、自分ばかり見に行くわけにはいかないと、兄さんのことだから考えているんだらう。その優しさが、つらかった。兄さんのすすだらけの黒い作業服も、つらかった。おれの分まで一家の柱として頑張りねばと気負う兄さんが、気の毒でならなかった。おれのせいで、と、またもやうつむいた。

次の日の夜、お母さんは汽車に乗って、近くの街へと内職で作ったものを卸しに行き、兄さんは炭鋸の仕事が泊まりがけになるとのこと、おれは家に一人でいた。お母さんも兄さんもおれのことをたいそう心配していたけれど、生まれつきこの身体なのだし、身の回りのことは、半日ぐらいいなくても困らない範囲では、一応できていたから、「心配しすぎだよ」と笑って送り出したのだった。

月のきれいな夜だ。そう思いながら、空を見る。けれども、何やら、胸騒ぎがする。落ち着かないのだ。先程から、いつもと違う気配があるような……。このあばら家には誰も用事はないはずなのだが、まさか千代ちゃんや勇ちゃんじゃあるまいに、と思いつながら、気配に集中していると、窓に人影が映った。びくりとして、窓を見



ていると、黒い頭巾が覗く。その黒い頭巾から、声がした。

「初めまして。見世物小屋の噂は、聞いているかしら。私は、その一座の者です」

声からして、女の人らしい。驚いて目を丸くしている。と、その人はおれの返事を持たず、続けた。

「あなたに会わせたい人がいるの」

そう言いながら、その人は家に入ってきた。そうして、おれを抱き上げて、外に置いてあつた輿の中に入れる。そのまま、運ばれた。一体、どうということなんだ。千代ちゃんと勇ちゃんが、見世物小屋の人に頼んでくれたのだろうか。そうとしか考えられない。目を白黒させながら、おれは、ただ輿の中で揺られていた。

下ろされた場所は、舞台の前だった。おそらくこれが、見世物小屋の中なのだろう。もう夜中だというのに、まだやっているのか、と思つたが、自分以外には客がないことに気がつく。不思議に思つていると、舞台上に琵琶を持った男の人が現れて、座つた。その人は、琵琶をかき鳴らしながら、哀れを誘う声で何やら歌い始めた。

「あの人は、目が見えないの」

「えっ」

横に立っていた、黒ずくめの女の人は舞台を見たまゝ、そう言つた。改めて、舞台の上で琵琶をかき鳴らすその

人を見ると、目をつぶっている。あの人も、身体に不自由があるのか。そう思うと、何だか妙に、親しみを感じていた。

「見世物小屋では、あの人のように不具者でも立派に生計を立てている人もいるのよ」

「不具者でも……」

「そう。あなたに、こんな風に生きている人もいるのだと、教えてあげたかったの。あなたのお友達二人が、今日見世物小屋に来て、どうして武雄お兄ちゃんを連れてきちゃいけないの、と騒いでいたから」

「千代ちゃんと、勇ちゃんが……」

「別に、二人に頼まれたわけではないの。二人と直接、話したりもしなかつたわ。でも、私が気になつたから。だからあなたを、ここへ連れてきたの」

琵琶を聞き終えると、黒ずくめの女の人は、おれをまた輿に入れて、家まで連れて帰つてくれた。輿に揺られながら、おれは考えていた。先程見たこと聞いたことを、頭の中で繰り返し返す。おれも、あんな風に、芸をできないだろうか。例えば、おれはお話を作るのが得意だ。千代ちゃんと勇ちゃんに話をしてる内に、自分にも人を喜ばすことができるのだと、思つたものだ。あの見世物小屋で芸をできるようになれば、自分で生きていける。もう、母さんや兄さんに、迷惑をかけることもなくなる。

家の前で、興から下ろしてもらいながら、おれは、意を決して訴えた。

「おれを、見世物小屋に入れてもらえないでしょうか」  
黒ずくめの人は、おれを見たまま、しばらく黙っていた。そして、

「私は、あなたをうちに入れようと思つてあなたに声をかけたのではないのよ」

と言つた。それはそうなのだろうが、ここで引き下がれない。それと同時に、ふと、何故自分に声をかけてくれたのかと氣になつた。

「じゃあ、どうして……」

「昔の私に、あなたが似ていたから」

「え？」

「外を歩いているだけで、好奇の目で見られるのはつらいことだわ」

そう言いながら、その人は黒い頭巾を下ろした。目を見張る。頭巾の下には、抜けるような白い肌に、透きとおるような青い目と、鮮やかな金色の髪があつた。文明開化以来、異人さんとの貿易が、再び始まつたと聞く。しかし、本物の異人さんには、今までお目にかつたこととはなかつた。なるほど、これでは好奇の目にさらされてしまうのもうなずける。月の光に照らされて、その瞳も、髪も、きらきらと輝いていた。「でも皮肉ね、私は

そのおかげでこうして食べていけるもの」と言いながら、異人さんは、手櫛で金色の髪を整えた。

「あなたは家族に大事にされているのでしょ。お母様とお兄様と共に、ここで生きていくことは選ばないの」

まつすぐにおれを見つめて言われて、たじろいだ。母さんと兄さん。確かに、二人が自分を邪魔に思つていないことは分かっているのだ。自分を大切に思つてくれることも。おれがいなくなつたら、どんなに驚いて、どんなに心配をかけるだろう。そう思つたけれど、それからこそ、つらいのだと思ひ直した。

「……そりゃ、一緒にいたいです。でも、おれ、本当に大事にされていて。だからこそ、何も返せないのがつらいんです」

「あなたがそこにいるだけで、二人が救われていることだつて、たくさんあると思うわ」

「それでも、です。おれのために、二人がどれだけのものを犠牲にしてくれていることか。二人の一生を、おれのために縛りたくないんです」

そうだ。おれがいる限り、二人は多くのものを犠牲にしなければならぬのだ。それに、このままでは、おれがいるために、兄さんはお嫁さんもとれないかもしれない。そんなことになったら、何と謝ればいいのかも分からない。それでもお前のせいじゃないと、おれは女に相

手にされないのさと笑うであろう兄さんの姿が、目に浮かぶ。そう言ってくれる人だとわかつているから、苦しいのだ。

「おれを連れて行ってもらえませんか」

青い瞳は、何を考えているのか読めなくて、どきりとした。けれども、次の瞬間、ふわり、と笑ったその顔が、あまりにも優しいから、思わず息を呑んだ。

「あなたなら、きっと良い芸ができるわ」

「……は、はい！」

「そうね。公演の最終日の晩に、迎えに来るわ。待っていて」

「わかりました。ありがとうございます！」

深々と、自分のへそを見るかのように、お辞儀をした。「お礼はいいわ」と、去っていくこうとする異人さんの後ろ姿を見送りかけて、はっとする。思い切って、声をかけた。

「……あの！」

その言葉に、異人さんは振り向いた。少し首をかしげて、おれを見ている。

「もう一つ、お願いがあるんですけど、聞いてくれますか」

少年が一人、村から消えた。

少年の姿が布団の中にないことに気がついた母親は、家中を探したが、どこにも息子が見当たらないことに気がついた。母親は、半狂乱になって外に飛び出そうとした。しかし、いつも座っていた椅子の上に、手紙が置いてあることに気がついた兄が、それを止めた。手紙を読み進めていく内に、二人の目からは涙があふれた。

拝啓 お母さん、お兄さん

この手紙は、見世物小屋の方にお願いをして、書いてもらっています。まず、勝手にしたことを謝らなければなりません。相談もなしに行つたこと、本当にすみません。おれは、見世物小屋の一座に入れてもらうこととなりました。見世物小屋には、不具者の方も働いていらつしやり、おれもその人たちに混じって、頑張りたいと思います。自分の力で、立派に生きていけるように、芸をみがきたいと思います。何も心配はいりません。ご飯も食わせてくれるとおっしゃっていますし、お風呂の手伝いもして下さるそうです。これは無理強いされたことでもなんでもなく、おれが自分で決めたことです。

また、青木さんのところの千代ちゃんと、黒田さんのところの勇ちゃんに会ったら、ありがとうございますと言っていた

と伝えておいて下さい。二人がもしおれがいない理由を尋ねたら、病気にかかったので大きな病院に入院したとしても言っておいて下さい。二人は、おれの遊び相手になつて、おれの作つた話を楽しそうに聞いてくれました。二人のおかげで、自分がお話を作るのが上手なのだと知ることができましたので、それを生かした芸をしようと思つています。

それでは最後になりましたが、今までおれのために、つらい思いをさせてすみません。迷惑ばかりかけておりましたが、おれは本当に幸せ者でございました。もう一緒に暮らせなくとも、おれは、どこにいてもずっと、お母さんとお兄さんの家族です。どうかお元気で。

武雄

「帰つてきておくれ。帰つてきておくれよ、武雄」  
読み終えて、嗚咽を洩らしながら、母親は言つた。

「つらい思いだなんて、お前のせいじゃないじゃないか。どうしてお前がそんな、」

泣き崩れながら、そう呟いた。

「迷惑なものか。武雄のおかげで、おれらだつて明るく頑張れたんだ。武雄の話を聞くのが、おれの楽しみだったんだよ」

兄は、手紙を握り締め、顔をくしゃくしゃにしながら

泣いた。

少年の名前は、武雄と言つた。彼の母と兄は、手紙を読みながら武雄のために涙を流した。落ちた涙で、手紙がところどころしみになつてしまつたが、二人は泣き続けた。そうして、やがて涙が枯れ果てた頃、手紙の最後に記された、「追伸 いつか一人前になつた自分の芸を、二人に見せに戻つて参ります」という言葉を信じて、二人は少年の帰りを待ち続けるのだつた。

### 有須の章

少女の名前は、有須と言つた。

有須は、黒い手ぬぐいをすつぱりと頭巾のようにして両手で抑え、身を隠すようにしながら、通りを歩いていた。うつむいて足早に歩く有須の横を、ガラガラと音を立てて、馬車が通り過ぎようとした。連日続いた雨で、道路はぬかるみ、あちこちに水たまりを作っている。その内の一つの水たまりに車輪が突つ込んで、びしゃりと泥水を跳ねさせた。泥水がまともにかかり、有須はきやあ、と小さな悲鳴をあげた。同時に、手ぬぐいから手を離してしまい、黒い布は、はらりと音もなく地面に落ちる。

すると、金色の髪の毛と、青い瞳がのぞいた。周囲の視線が有須に集まる。珍しいものを見る、好奇の視線に晒されて、有須は慌てて黒い手ぬぐいを拾い、頭から首にかけてを包み込み、しつかりと両手で巻きつけた。そして、その場から一刻も早く逃れたい一心で、せかせかと足を動かすのであった。既に外国人の多く行き交う街ではあったが、乞食のようないで立ちをした、金色の髪の毛と青い瞳の少女は珍しく、周囲の目を引いた。

細い路地に逃げ込むようにして入り、有須はほっと一息をつき、虚ろな目をして、鉛色の空を見上げた。

私の居場所は、どこにもない。家にも、街にも、どこにもない……。

これから家に帰らなければならないことを、有須はひどく憂いていた。しかし、外にも居場所がないことは、重々承知していた。外では、母に持たされた黒い手ぬぐいは外せない。先程のように、周囲からの痛いぐらいの好奇の眼差しにさらされるのが、つらかった。着ているものと不釣り合いに、目鼻立ちのはっきりした少女の顔は、どうしても目立ってしまう。

でも、家に帰れば、母さんがお酒を飲んで私につらくあたるから、帰りたくない。私を騙して捨てたあの男にそっくりだ、お前のせいで恥ずかしい思いをしなければならなかった、忌まわしい髪の毛だ、瞳の色だ、そう

怒鳴りながら、私に酒の瓶を投げつけるのだ……。

家にも、外にも、どこにも自分の居場所はない。ぎゅう、と頭に巻きつけた手ぬぐいをいっそう強く握り締めながら、うなだれた。その内に、またぼつぼつと雨が降り始めた。有須は仕方なく、重たい足を引きずるようにして、のろのろと歩き出す。

一体、自分の居場所はどこにあるのだろうか……。そう思いながらも、有須には、細い路地を幾度も曲がり、自分と唯一血の繋がった、たった一人の家族の元にしか、帰る場所はないのであった。



「そう言えば、聞きました？」

「何ですか？」

「見世物小屋が今、この町に来ているそうですわ」

「まあ、そうなの」

「わたくし、是非見に行きたいのですけれど、お母様がそんなものを見に行くのははしたないと仰っていて、許してくださらないの」

「あら、じゃあ、わたくしと一緒に、明日の学校の帰りに、こっそり行きましょうよ。少しだけなら、ばれやしないわ」

「まあ。はしたない真似をして、と、見つかったら、大目玉ね」

「だから見つからないように気をつけるのよ。いつも真面目にお稽古しているんですもの、たまには息抜きしなくっちゃ」

日が傾き、辺りが闇に染まり始めた黄昏時。色とりどりの袴を着た女学生たちが、楽しげに笑いながら私の前を通り過ぎる。誰も彼も、漆黒に艶めいた、長い髪の毛を風になびかせて、何かのお稽古事の後だろうか、家路へと向かっているようだ。私は、頭から首へかけて巻きつけた黒い手ぬぐいを、ますますしつかりと握り締め、手ぬぐいの内側で、自分の視界の端に見える金色の髪の毛に、小さくため息をついた。せめて髪の色ぐらい、お母さんに似ていれば良かったのに。そうすれば、もう少し違った今があったかもしれない。

自分は生まれて来ない方が良かったと、何度思わされたか分からない。お母さんはいつも、眉をひそめ、汚らわしいものを見るようにして私を見ていた。機嫌のいいときは本当にごく稀で、そのときはほとんど、知らない男の人がお母さんの隣にいた。

私と二人きり有的时候きに、お母さんが機嫌が良かったことは、一度きりしかない。そのときのお母さんは、ひどくお酒に酔った状態で、家に帰ってきた。帰ってきた途端、玄関に崩れるようにして倒れこんだお母さんを見て、驚いたことに、にこりと笑ったのだった。

「今日はねえ、ありす、カフェーに連れてってもらったんだよ」

名前でもらうのは、いつ以来だろうかと考えながら、お母さんを見る。相当酒に酔っているらしい。飲み屋で給仕の仕事をしていることもあって、酒に強い母が、前後不覚になるなんて、一体どれほど飲んだのだろう。上機嫌に笑顔なのが嬉しいとすら思えなかった。こんなお母さんは初めてだったから、むしろ、怖かった。

「あなたのお父さんにねえ、初めて会ったのも、今日行ったみたいなお父さんでだった……。出会ったばかりだというのに、これまでにないほどに話も弾んで、とても楽しかった。おしゃべりが上手で、手品ができた」

熱に浮かされたように、とろりとした瞳をして、何もない虚空を見つめるその様子は、思い出に耽っているかのようにだった。父の話を聞くのは、これが初めてではない。けれども、お母さんの話す父の話はいつも同じ、生まれたばかりの私と母を捨て、遠い異国の地へと帰ってしまった父への恨み言であった。こんな話は初めて聞く。幸せな思い出話をするように、父の話をする母は、初めて見る姿であった。

「生まれたばかりのあんたの顔を見て、女の子か、ならば名前はアリスにしようって、あの人はそう言った……。いい名前だと、思った」

夢見るように話す母の姿に戸惑いながらも、話に聞き入っている自分がいた。お母さんは、私を見て、「そうだよ、有須」と笑った。

なんとも返事のしようがなくて、そのままの姿勢で固まっていると、お母さんは私の膝にずりずりと滑り落ち、寝息を立て始めた。引きずるようにして何とか寝床へと運び、先程の言葉を頭の中で繰り返す。私の名前をつけたのは、お父さんだったのだ。お父さんは、生まれた私を一度も見ることもなく、故郷に帰ったのだとばかり思っていた。違ったのだ。

おしゃべりが上手で、手品ができたお父さん。金髪で、青い瞳の、お父さん。カフェーで出会ったということは、お母さんと同じように、お酒が好きだったのだろうか。見たこともない父の姿を、頭の中で思い浮かべようとしてみた。

次の日のお母さんは、二日酔いの頭痛に悩まされているせいもあって、いつも以上に不機嫌で、昨夜のことは全く覚えていないようだった。聞けばますます怒らせてしまう気がして、聞くことはできなかつた。昨夜のお母さんは自分の願望が見せた夢だったのではないかとさ

え、思った。

とにかく、お母さんが私の前で機嫌が良かったことなど、それ一度きりだ。考え事をしながら歩いていると、いつの間にか家の前に着いていた。玄関の前で一旦立ち止まる。すう、と息を吸い込み、

「ただいま、お母さん」

からからと引き戸を開けると、部屋の中央に座っているお母さんの姿が目に入った。酒の瓶を持っている。また飲んでいたのでろう。玄関を開けてすぐに分かるほど、家の中は酒臭かった。思わず眉をひそめてお母さんを見ると、お母さんはこちらをじろりと睨んだ。

「なんだい、その目は」

「あの、お母さん、お酒、飲み過ぎると身体に良くないよ……。ただでさえ、夜に仕事でお客さんと飲むんだから」

「うるさい！」

怒鳴られて、縮こまる。更にぎろりと睨まれて、その場に棒立ちになった。

「誰のせいだと思ってるんだい。あんたのせいじゃないか。あんたと、あの男のせいじゃないか。何でこんな、あたしが、」

苛立ちまじりに、いつものように何を言ってもお前のせいだと吐かれる暴言は、耳にも心にも突き刺さるよう

で、痛い。恐ろしくて、悲しかった。

「お母さん」

「うるさいって言ってるんだよ。黙んな」

「ねえ、でも、お母さん、」

「お母さんなんてあたしを呼ぶんじゃない！」

途端に、鈍器で殴られたような衝撃が頭に走る。酒の空瓶が投げつけられたらしいことが、がしゃん、と床に落ちて割れた酒瓶の破片を見て、分かった。瓶をぶつけられた右のこめかみ辺りに触れると、真つ赤な血が少し、手のひらにぬるりとついた。衝撃で、たんこぶができて、皮膚が切れてしまったようだ。触った感触からすると、傷は大したことはなさそうだけれど、頭だから多少、出血が多くなる。たたり、と生温かい感触がこめかみから頬に伝い、髪の毛にも広がる。

「出ていきな。あんたの顔なんて、もう見たくもない！」

玄関に向かって、指をさされた。悲しかったけれど、どうしようもないと思った。こんなことを言われるのは、もう慣れっこだ。これ以上ここにいても、お母さんを刺激するだけだ。もう少し時間が立てば、お母さんも仕事に行くはずだ。それまでは今少し、外で暇を潰していよう。そのまま黙って踵を返し、外に出た。

痛い。頭も痛いし、心も痛い。夜の闇は恐ろしいものだと言うけれど、闇の中では私の姿は見られることはな

い。手ぬぐいを取っていても、好奇の視線にさらされたりはしない。私にとっては、昼間よりも夜の方がずっと優しかった。慣れ親しんだ暗い路地は、他に行く場所のない私の姿を、すっかりと覆い隠してくれた。とても痛かったけれど、いつもの路地を歩いてみると、少し落ち着いた。途中でしゃがみこんで、頭に手をやる。血は半分乾いていて、どうやら止まったようだ。ほっとした。

薄汚れた壁に背中を預けて、そのまま地べたに座り込む。あと一時間ぐらいで、お母さんは仕事に向かうだろうか。それまでここにいろしかない。けれど、冬の野外は寒くて、手足がかじかむ。昼間は太陽の熱で幾分か暖かくなるが、日が沈んでからはどうにもならなかった。闇の中だからと一度は取っていた手ぬぐいを、またしっかりと被り、身体を抱き締めるようにして、がたがたと震える。歯の根が噛み合わず、がちがちと音を立てた。

このままずっと、朝までここにいたら、死ぬのかな。それでもいいか。どうせ、私がいなくなっただって、悲しむ人はいないんだから……。そう思って、そっとまぶたを閉じた。

「あんた、何しとるん」

が、すぐに頭上から降ってきた言葉に、ぱちりと目を開けた。首を動かすと、目の前には、燕尾服を着て、シルクハットを被ったちよび髭のおじさんが立っていた。



「何しとんの。こんな寒い中、外におつたらあかんで。凍死してまうやろ」

そう言いながら、おじさんは自分の羽織っていた外套を、私に着せかけてくれた。

「ほら、家に帰り」

「……帰れません」

「何でや。お母ちゃんと喧嘩しとんのか？」

「違います。……いえ、あんまり違わないですけど。出て行けと言われたので」

「呆れたやつぢやなあ。出て行け言われて何ですぐ出てくるんや。そこは意地でも家におるべきやろ、こんな寒いのに。今頃あんたのこと、お母ちゃん心配して探してるで」

「探しているわけ 아닙니다。私はお母さんにとっていない子なんですから、このまま死んだ方がいいんです」

着せかけられた外套を脱ごうとしながら、ぶつきらぼうに返すと、少しおじさんは黙って、「何か、訳ありみたいやな」とぼそりと呟いた。そして、差し出した外套を、再び私に着せかける。何か言い返そうとする私に、「このままここおつたら、ほんまに死んでまうで。行くところないんやったら、着いてきい」と言って、歩き出した。どうしようかと思わず迷う。けれど、どうせ死んでやろうと思っていたのだ。いざとなれば舌をかみきって死

んでやればいい。そう思って、おじさんの後ろから着いて行った。

「ここや。こん中入り」

着いた先は、小屋だった。丸太や木の板で作られた簡素な小屋は、蛇を食いちぎる女だの、火を吹く男だの、たこの足の生えた女だのが描かれた看板と、緑と黄色と赤の垂幕に、ぐるりと囲まれていた。入り口から入るように促されて、おそろおそろ入る。がらんとした空間には、舞台が設置されていて、その舞台の灯りで、小屋はほの明るい。

「何か飲み物持ってくるわ。そこで待っとり」

「ここは……」

「噂、聞いとらんか？ここは見世物小屋や。手品やら火を吹く芸やらを、各地で見せて回ってる一座や。そんで、わしはこの見世物小屋一座の団長やねん。よろしゅうに」

見世物小屋。どこかで聞いた言葉だと思った。そういえば今日、近くを通り過ぎた女学生が話していたような気がする。けれど、それ以上に、手品という言葉に、私の心は動いた。

「手品を見せているんですか？」

「ああ。それも見世物の一つや……、ってあんた、怪我しとらんか？頭巾に血が滲んどるやんけ。手当せな」

「あっ」

手を払いのける暇もなく、ぱっと手ぬぐいが取り払われた。団長の瞳が見開かれる。

「あんた……、異国の娘か？」

私の青い瞳と、金色の髪の毛にたいそう驚いた様子で、団長は目を丸くしていた。うつむいて、「父が異国の出なんです」と答える。それで何となく複雑な事情であると察したのか、団長はそれ以上、私の生い立ちについて、何も聞かなかった。その代わり、「あんた、出て行けと言われた、って言うてたな。これからどうするんや」と尋ねられた。

「あのまま死ぬしかないかと思っていました……。戻ったとしても特に何も、」

「せやったら、一度は死んだ命や。うちで働かんか？」

「え？」

驚いて、固まった。

「異国の血の入った娘は貴重やからな。きつと、お前はうちではええ見世物になれる。どうやろう。寢床も、食事も、勿論きちんと出るし、手当も出る。このまま死ぬぐらいなら、うちで働いてみる気はあらへんか？」

奇妙に耳鳴りがした。心臓がうるさいぐらいに、跳ねているのがわかった。気がつけば、反射的に頷いていた。

どうしてほとんど何も考えずにこんなことを決断できたのか、分からない。今まで考えもしない選択肢であっ

た。この町を出るなどということも、母から離れて暮らすということも。なんだかんだと言ったって、私の居場所はこの町と、母の元にしかなかった。こんな見目では、受け入れてもらえる場所など、他にあるとは思えなかった。私は頷いて初めて、自分の居場所が欲しいと思いがらも、それと同じぐらいに、今の暮らしから逃れたいと、自分が渴望していたことを知った。

「決まりや」とにっこり笑った団長は、私を連れて奥の小部屋に入った。そこにはずらりと人が並んでいて、皆、私を見て、一瞬驚いた顔をした。しかし、団長が「皆の新しい仲間や。仲良うしたってや」と言うとき、ああ、と得心したような顔になった。そして、団長は、私に仲間を紹介してくれた。

「こいつが火吹き源三、あつちが琵琶弾きの彦六、そつちが……」

誰も彼も、珍しそうに私を見るけれど、私も同じくらい、他の人達を好奇の目で見ていたので、おあいこだった。こんなに奇妙な人たちは、初めて見たのだ。一風変わったっている、はみ出し者の集団、という印象だった。私と同じに。「また団長が、拾ってきたんかいな。これで何人目や」とけらけらと笑っている人もいた。どうやら私のように急に連れてこられるのは、ここでは珍しいことではないらしい。仲間を紹介されると言うことで緊張

したものの、すんなりと受け入れられる雰囲気なのに、拍子抜けした。挨拶が終わってしまえば、皆、また思い思いに好きなことを始めた。その様子を見て、自分のこと以外には余り関心が無さそうなのが、ありがたいと思つた。私の生い立ちにも興味はないのか、誰も聞いてはこなかった。それが嬉しかった。ただ、「お前、名前は」とだけ聞かれたときには、「有須、といいます。よろしくお願いします」と頭を下げた。

一度荷物を取りに戻るために家に帰って来いと言われ、見世物小屋を出た時には、空は大分白んでいた。

「……お母さん」

家に帰ると、仕事を終えて帰宅したらしいお母さんが、部屋の中央に横たわっていた。これがきつと、お母さんを見る最後なのだ。そう思うと、少し寂しいような気もした。そつと呼んではみたけれど、返事は返つてこなかった。床を見ると、出て行く前に私に投げつけた、空瓶の破片が、そのままになっている。

お母さんの傍に寄ると、強い酒の臭いがぶうんと漂つて、顔をしかめた。酒の臭いが母のにおいだと思うほど、いつも酒の臭いを漂わせているお母さんだったけれど、今夜はことさら強かった。お客さんに付き合つて、結構な量を飲んでいたのであるかもしれない。首まで真っ赤なお母さんは、床に大の字に転がって、寝息を立てていた。

短い置き手紙を書いて、お母さんの横に置く。寝顔を見ながら、母親らしいこともしてもらえなければ、娘らしいこともしてやれなかった、と思う。こんなものなのだろうか。何とあつけない別れなのだろう。もつと自分は、家に帰ってみれば、寂しいと思うのではないかと思つていた。そうでもなかった。何も湧いては来なかった。この家で母と暮らした思い出は、毎日同じ事だけの、単調な繰り返しだった。たった一度、お母さんが上機嫌だった夜以外には、何も思い出がないことに気がついた。

お母さんも可哀想な人なのだ。恨む気持ちよりも、母も哀れと思う気持ちの方が強かった。けれども、他にどうしようもない。私とお母さんには、埋められない溝がある。お母さんは私の姿を見る度に傷つき、私はお母さんの姿を見る度に怯える、悪循環しかなかった。こうして母と離れることが、きつと、お互いにとって、一番良いのだろう。

お母さん、私、手品をする人たちのいる場所に行くんです。お父さんがお上手だったんですよ。出来る事なら、お父さんの話を、もつと聞いてみたかったと思います。お父さんは、どんな手品を見せてくれたのでしょうか。その私が、手品をする一座に入るといふのは、何やら奇妙な、運命のめぐり合わせというものを感ずるのですが、どうでしょうか。

最後にもう一度だけ、しっかりとお母さんの顔を見た。

そして、そうつと玄関から出る。白々と明け始めた空の中、私は自分の家だった場所を出て、一度も振り返らず、見世物小屋へと駆け戻った。

見世物小屋に戻り、「終わりました」と言うと、団長は、「そうか」とだけ言って、代わりに手に持っていたものを差し出した。

「有須、お前、この歌を覚ええ」

紙を渡され、広げて見ると、歌詞らしき異国の文字の下に、日本語でふりがなが振ってあった。

「これは……、異国の歌ですか？」

「そうや。お前を売り出すための謳い文句に、使おうと思ってる。この歌で、お前は芸をするんや」

団長は、にっこりと笑う。

「きつとお前は、この一座の花形になれるで。わしが保証する」

そう言って、団長は、大きな手で私の金色の髪の毛をくしゃくしゃと撫でた。例え見世物としての価値を見出されたにしろ、ここにいってもいいと言ってくれる人のところにいるのは、何と居心地のいいものだろう、と思つた。ぐるりと頭をめぐるして、小屋を見回す。ここが今日から、私の家になるのだ。



少女が一人、港町から消えた。

少女の母親は、自分の言葉で、本当に娘が出て行ってしまったことに、呆然とした。最初は手紙に気づかず、こんな寒いのに、まさか外でのたれ死んでいるのではないだろうか、と不安に思つて、いつも少女が歩いている路地裏を歩いて探してみたが、それらしき姿は見当たらなかった。あのまま死んでしまったわけではないらしい、とほつとすると同時に、ではどこに行ってしまったのだろうか、と思つた。もしも娘を見つけた場合に、あからさまに探していたと思われるのが嫌で、普通に歩くふりをしてちらちらと路上に目を配るなど、ばかばかしいことに気を回していた、先程までの自分が、心底くだらないと思つた。一旦家に帰つたところで、枕元にあつた手紙に気がついた。

その手紙を読んで、警察に行こうか、と迷いもした。今ならば、自分のもとに連れ戻してもらえるかもしれない。しかし、警察署の前でうろろするばかりで、不思議に思つた警官に、どうされましたかと声をかけられると、飛び上がってなんでもないとそそくさと逃げるように帰ってしまった、ついに警察に言うこともできなかった。

少女がいなくなつて数日後、自分以外に誰もいない家の中で、娘がいけないというのは、こうも寂しいことだったのか、と母は思った。それと同じくらい、やっと解放してあげられた、とも思った。冷たく当たっている自分に、自己嫌悪しながらも、憤懣のやり場を、他に見つけられなかった。

一体どうすれば良かったのだろう。せめて、父親の思い出の品だけでも、見せてやれば良かった。戸棚の奥にしまいこんでいた、古びたトランプを取り出す。これであの人は、手品をしていたんだ……。トランプを抱き締めて、少女の母親は、涙を流した。



それから数年たち、少女は成長し、大人の女性となつていた。背も伸び、体つきも丸みを帯びて、立派な女らしくなつていたが、相変わらず、黒い頭巾ですっぽりと顔を覆つていた。女は今、次の巡業へと向かうべく、一座の仲間と共に船に乗つていた。そして女は、甲板に立ち、一座の団長と話をしていた。

「次は、女の子がええな」

「女の子、ですか」

「そうや。いつもの通りに子供の目利きを頼むで、有須」

「分かりました」

女は頷いて、了承の意を見せる。団長である男は満足そうな顔をして、船室に戻つて行つた。後ろ姿が船室に消えるのを見届けてから、海の方へと視線を戻すと、甲板に立つ女の目は、近くに見える陸地の、崖の上に立ち尽くしている少女の姿を捉えた。どうやら次の巡業地の村人らしい、と女は思う。

少女の立っている崖の後ろに広がる集落と、周囲の海にちらほらと見える漁船の姿。海辺の村が、見えてきた。

— こばやし・しおり 2012年度卒業生 —

〔付記〕表現上の断り

作中使用されている表現の中に、差別的用語が含まれているが、編集委員会としては、作品の主題や世界観を表す上で必要な表現であると判断し、敢えて原文通りに掲載した。